国際医療協力
海外だより 160

パルダの向こう側
～パキスタンの女性の暮らしと健康～

国立国際医療研究センター　国際医療協力局
運営企画部　保健医療開発課　駒形　朋子

初めてパキスタンに降り立った雨上がりの夜は、湯気で編んだガウンでも着せられたようなまとわりつく熱気と、満開の夜の女王（ナイトジャスミン）の甘い香りにあふれていた。パキスタンでは、それまでの価値観を軽々と超える不思議なことが毎日おこり、特に女性の暮らしぶりや行動は文字通りパルダ（ヴェール）に包まれていた。そのおもしろさが、人の日常生活行動と健康を研究するきっかけとなり、魅せられ続けて現在に至っている。パキスタンは残念ながらネガティブな文脈で登場することが多く、その良さが語られることは少ない。まして女性たちの「暮らしぶり」は、ほとんど見えない。もう20年ほど前の話ではあるが、グローバル化の渦中にある今だからこそ、パルダの向こう側のことをお伝えしたいと思う。

愛すべき国、パキスタン

パキスタンは、北はヒマラヤ山脈の西端から南はアラビア海まで、豊かで多様な自然環境に恵まれた美しい国である。4000メートル超の山肌に映る銀色の月影や、真夏の夜の地平線に流れ落ちる滝のような天の川、風が渡る黄金色の小麦畑、今も忘れられない美しい景色は、枚挙にいとまがない。そこに暮らす人々の９割以上がイスラーム教徒であり、聖典クルアーン（コーラン）に著された教えを基盤に暮らしている。コーランには、日常生活の様々な規範が実に具体的に示されている。そのひとつに、旅人を歓待せよというものがある。パキスタンの人々にとって外国人の私は旅人であり、どこに行ってもだれもが親切にしてくれたことは特筆したい。手術室看護師だった私は青年海外協力隊員として、首都イスラマバード市内の小さな国立病院に日本人ひとりで配属された。しかし、実際にひとりになる機会はほとんどなく、職場の人々がいつも私に♪グリヤ・ジャパニ（日本の人形）、と古い映画のテーマソングを歌ってはかまってくれたことが、あたたかく思い出される。また私は、看護師寮や家庭でパキスタンの人々と暮らした期間が長かった。家族の愛情（と時には束縛）によって育まれたイスラームの人々の考え方や行動規範への理解は今も重要な価値観のひとつとして私の基盤を形づくっている。

半年以上を過ごした村の家と家族。前列左が筆者。

患者に○○してはいけない

だからといって、すべてうまくいっていたわけではない。自分の小さな世界から出たばかりの私には、納得できない対処できないことがたくさんあった。雨の日が良い天気とか、はいというとき首をかしげるとか、怒った七面鳥に道をふさがれて出勤できないとか、びっくりしない日はなかったが、パキスタンで過ごした全期間を通して最もおどろいたことは、何といっても着任初日に上司に言われた「看護婦の心得」であった。カラチ美人の師長がその大きな目で私をじっと見て言ったことは、「勤務中に笑顔を見せてはだめよ。患者さんに優しくしてはだめ。特に男性の患者さんに優しくしたりしたら、お嫁さんにしようとして誘拐さ

れるからね。」であった。

コーランには、美しいものは隠しておきなさい、とも記されている。パルダは、美しいもの＝女性を見せびらかさないためのヴェールでありカーテンである。女性は原則として家族や親族以外の男性とは接しない。口をきくことはもちろん、目も合わせない。そのため、男性患者の手を握ったり、背中をさすって優しく声をかける、といった日本ではあたりまえに行っていた看護は、ここでは禁忌だった。この社会の文脈では逆に失礼であり、不快なことなのである（誤解を招くおそれもあり、誘拐もあながち冗談ではない）。

また、女性の患者が男性の医師の診察を受けることも、まずない。慣習上女性一人では病院に来ることはないので、男性医師しかいない場合は、同行する男性家族が医師に症状を伝えるが、男性医師が女性患者の身体に触れて診察することはない。この国での医療へのアクセスの構成要因は、医療施設の数や質、医療従事者数だけではなく、女性医療従事者の有無、女性が家族以外の男性の目に触れることなく受診ができること、も含まれる。女性が健康でいることは、難しいのである。近年日本でもムスリムの女性患者も増えてきているが、女性の医療従事者でないと診療を受けられないというのは決してわがままではなく、人としての尊厳に関わる重要な価値観であるという理解の浸透を願う。着任当初は患者に声もかけない看護師に強い違和感や憤り、無力感を覚えたこともあったが、次第に不可解がおもしろさに変化し、不思議な慣習や行動に出会ったとき、この人はなぜこうしているのか、その文脈に興味を持つようになった。それが研究テーマとなり、大学院での研究のために協力隊終了後再びパキスタンに渡って、ある農家の村で村長の娘として暮らした。

病院の看護師仲間。左から２番目が師長

パキスタンにおける女性の立場についてもう少し説明したい。女性は家にいることが大前提なので、女性が就ける「職業」が非常に少ない。一般的なのは教員や医師、看護師ぐらいで、会社員はほとんどいない。商店の店員も男性なので、市場では売る方も買う方も男性ばかりである。ただし、女性たちは家の外でお金を稼いでくる仕事をしていないだけで、パルダの向こう側、家の中でそれはもう忙しく働いている。特に農村部では、水道も電子レンジも掃除機も洗濯機もない中すべて手作業で大家族の家事を行い、家畜の世話や農作業をし、たくさんの子どもの世話をする。それでも、男性たちが昼寝をする時間になると、家の裏手の女性だけの抜け道を通って近隣に住む親戚の女性たちが集まり、刺繍や野菜の皮むきをしながら楽しく情報交換する。この情報網は５Ｇ並みで、村でのできごとや重要な情報を女性が知らないということはない。また、日本人から見るとパキスタンの女性の生活は制限があって大変そうなのだが、反対にたとえば役所での手続きなども自分ですると話すと「そんなことを自分でするなんて、かわいそう」といわれる。また、コーランで推奨される父方のいとことの結婚は、日本人には少し違和感があるが、パキスタンの女性は「親戚でもない、家庭環境もわからない人と結婚するなんてこわくないの？」という。それも一理ある。地域や状況によって、女性だから教育が受けられない、必要な時に病院に行けないといった、看過できない重大な課題もある。しかし一律にイスラームの女性は抑圧され不幸である、ということではなく、異なる社会の文脈では大切に思うものが違うこともある、という理解はこれからますます重要だと思う。

人生は過ぎていくもの

パキスタンの言葉、ウルドゥー語のあいさつのやり

庭の片隅で、子守をしながら食器を洗う少女

１日３回の水汲み。公共の井戸で素焼きのつぼ３つに水を汲み、両脇と頭の上に乗せて運ぶ。

村の空き地で遊ぶ子ども

とりで「最近どう？」「過ぎて行ってるよ」という、諸行無常に似た表現がある。ムスリムにとって、現世は神のもとに行く来世のためのものである。会話の中にも「インシャアッラー（神様が望んだら）」という一言がしばしば登場する。約束事にこう返されると不安になるが、神様が決めることだから、今日死ぬかもしれないし明日来られるかどうかわからない、という意味だそうである（それは自分のせいじゃない？と思う約束不履行も多かったが）。私の親友だった敬虔なムスリム女性は、「よく心臓発作で死んだっていうけど、それは止まったのではなくて神様が心臓を止めたのよ。痛みや苦しみは嫌だけど、死ぬこと自体はこわくないから私は大丈夫。」と言って９.11のテロの際、帰国する私を見送ってくれた。

また、マラリアにかかった時もだいぶ異なる死生観に直面した。教科書通りの悪寒戦慄と高熱を繰り返し、爪が見たこともないような紫になるのを見て、私はパキスタン人の家族に「こんなに具合悪いのは初めてだから、死ぬかも」と訴えた。すると家族は「大丈夫！もし死んだら家の近くに埋めて、毎日みんなで祈るから」とあたたかく励ましてくれた。でも私はムスリムではないから、みんなの天国には行けないよ、というと「大丈夫、ムスリムのために働いたから天国に行けるよ」といい、俄然祈り始めた。翌日から見舞い客が引きも切らず、ぐったりした私の枕もとで回復あるいは天国に行けるよう、たくさんの人が祈ってくれた。幸いまだ死ぬときではなかったようだが、死生観のちがいと「人生は過ぎていくもの」という感覚を、身をもって理解した一件だった。

グローバル化の拡大によって大小の文明の衝突が世界中のどこでも起こり、私が体験したような様々な不思議に直面する人はますます増えるだろう。異文化に敏感かつ鈍感で、違いを優劣ではなく相違として受容・共生できること、それが「ニューノーマル」のひとつになることを願う。イスラームの世界で外国人女性として働くことにはもちろん難しさもあるが、女性だからこそパルダの向こう側にも行ける。イスラームの女性の生活の文脈を理解すること、それに則した健康の実現に向けてこれからも活動して行きたい。